



女性患者の足をいねいに手当てる平原さん。

訪問看護の上級スキルを持ったナースも登場

訪問看護は1960年代に一部の病院で始まった。82年の老人保健制度創設で高齢者の訪問看護が診療報酬で認められ、92年には老人訪問看護

訪問看護認定看護師という資格も登場した。認定看護師とはある特定の看護分野において、熟練した技術と知識を持った看護師のことで、訪

問看護は1960年代に一部の病院で始まった。82年の老人保健制度創設で高齢者の訪問看護が診療報酬で認められ、92年には老人訪問看護

問看護認定看護師は訪問看護のプロともいえる。その数は131名とまだ少ないが、重要な存在になりつつある。東京都北区にある「あすか山訪問看護ステーション」には訪問看護認定看護師が3人いる。その1人で同ステーション所長の平原優美さんは、認定看護師の役割についてこう話す。

「訪問看護先では、必ず利用者さんの全身を観察するところから始めます。全身を触って、様子を確認して——というのは病院ではなかなかやっていないので皆さん驚かれます。ですが、これが重要なのです。例えば、ある患者さんは病院から「認知症が進み、歩行が困難」といわれていました。私たちがみると、長期入院で足腰が弱くなり、白内障が進んで目が見えにくくなっていました。歩行ができなかったのは、認知症以外のところにも原因があったわけですね」(平原さん)

身体部位ではなく、全身を見る。こうした全人的医療などを医学的根拠から学び実践の中心としているのが、訪問看護認定看護師なのである。



医療ジャーナリスト

伊藤隼也が行く!

ニッポンの医療現場 第7回

いま必要なのは看護の力

「わが家に帰りたい!」そんな願いを支援する「訪問看護」

訪問看護は病気や障がいを持った人が地域や家庭で生活できるよう、看護師が自宅へ訪問し療養支援を行うサービスだ。「最期はわが家で……」という願いを叶えるため医師と協働する例も多い。今回は日本の医療を変える鍵となる訪問看護に迫った。

生活重視の看護を実践 家族の安心も

福岡県某所。ここに1日3〜4件の訪問看護にあたるベテランの訪問看護師Aさんがいる。取材に伺った日、Aさんが最初に訪ねたのは、90歳を超える女性の自宅だ。女性は胃がんや脳梗塞を患い地元の病院に入院していたが、本人や家族の希望で在宅療養に変えた。

「在宅で見るようになり栄養のとおり方などを工夫したら、体調がよくなって。日中はお一人で穏やかに過ごされています」

というAさんの話のとおり、女性は軽く歌を口ずさみ、悲憤感など少しも見られない。やがてAさんは慣れた手つきで脈を測り、聴診器で呼吸音などを確認。さらに体温測定、痰の吸引、流動食、排便入浴のサポートなどを仲間の看護師とともに進めていく。

「終わりましたよ。また来ますね」と、にこやかに声をかけて女性宅を後にしたのは、1時間半あまり経ってからだ。Aさんがこの日最後に訪問したのは、乳がんを患っていた

「終わりましたよ。また来ますね」と、にこやかに声をかけて女性宅を後にしたのは、1時間半あまり経ってからだ。Aさんがこの日最後に訪問したのは、乳がんを患っていた



あすか山訪問看護ステーションの様子。

未来を担う訪問看護 壁を打破する方策は

実は、いまわが国の高齢者医療は病院から在宅へと向かっている。訪問看護の必要性がますます高まることは想像に難くない。

しかし、残念ながら訪問看護の発展を妨げる壁がいくつも存在することも事実だ。日本訪問看護振興財団常務理事の佐藤美穂子さんは、問題点として訪問看護ステーションの経営や運営面の脆弱性、制度面での複雑さなどを挙げる。

国内にある訪問看護ステーションの数は前述したが、このうちスタッフが10人以上いる施設は1割程度で、あとは数人で細々とやっているというのが実情だ。収入については診療報酬の改定で報酬は少し上がったものの、出来高払い

のため利用者が入院すれば収入は途絶える。収入とキャリアアップのいずれにおいても約束できないことから、訪問看護に意欲を持っている看護師でも、なかなか続けることはむずかしい。

制度面については、訪問看護は医療保険と介護保険の両方が関係し、利用料の違いやサービス導入の仕組みの違いから一般の人にとって使い勝手が悪く、これも普及を阻む大きな障壁となっている。

そして、もう一つ大きな問題は、認定看護師でも医師の指示なしでは何一つ医療行為ができない、ということだ。これについては看護師の業務内容を広げ、今までより高度な医療行為を行える「特定看護師(仮称)」の法制化が検討されている。これで医師の負担軽減や医療崩壊が食い止められると期待されるが、一部の医師の反対などがあり、実現には課題も多い。

医療界から「患者中心の医療」という言葉を聞いて久しいが、現実には医療者中心の医療になっている現場も少なくない。「患者中心」。この言葉の本質を理解する医療者がより増えることを願う。